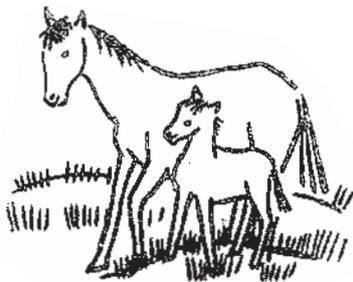




〈2025年9月27日開催 図書室のつどい 参加者の感想〉



鈴木裕子著

## 『まんぷくモンゴル!』

—公邸料理人、大草原で肉を食う—  
講座に参加して

渋谷 菜摘

私がこの講座を受講したいと思っ  
たきっかけは、私の職業と関係があ  
ります。私は日本語学校で留学生に  
日本語を教える仕事をしており、学  
生の中にモンゴル人がいるので、モ  
ンゴルのことをもっと知りたいと思  
ったのでした。職場の同僚を誘い、  
一緒に参加しました。

今回のお話は、公邸料理人として  
モンゴルでの暮らしを体験された鈴  
木裕子さんによるものでした。鈴木  
さんは元々都内の保育園で調理師を  
されていましたが、「代わりが誰で  
もいる仕事ではなく、どうしたらこ  
の専門知識を活かせるか」と考えて  
公邸料理人に応募されたそうです。

「公邸料理人」？ 初めて聞く言葉で、  
どんなお仕事？ なぜモンゴル？  
という疑問が湧きます。「公邸料理  
人」とは世界の大使公邸で働く料理  
人のことで、ご自身の希望でモンゴ  
ルに決まった訳ではなく、その時の  
空き状況で決まったのだそうです。

日本とモンゴル、全く異なる世界  
での生活は驚きの連続だったそう  
で、今回2時間に及ぶお話は大変興  
味深く、時間が足りないと感じてし  
まうほどでした。中でも印象に残っ  
たお話を挙げてみます。

モンゴルはとても寒く、しかも湿

度が極端に低い特殊な環境。それだ  
けでも「わあ、教室のモンゴル人留  
学生たち、よくこの日本の蒸し暑さ  
に耐えたなあ！」と感心させられま  
す。「日本にないものはモンゴルに  
ある、モンゴルにないものは日本  
にある」というくらい違いがある  
そうです。人口密度が世界で一番低  
く、水がないので植物が生えない、  
ゆえに限られた野菜しかない。そう  
いえばモンゴル料理は、肉料理が中  
心ですね。鈴木さんはモンゴルの

人々に野菜の大切さを伝えたいと思  
い、公邸料理人としての3年の任期  
を終えた現在でも、モンゴルと日本  
を行き来されているのだそうです。  
モンゴルといえば大草原を思い浮  
かべますが、今は首都ウランバートルに、全人口300万人のうち半数  
が住んでいる、というのにも驚きです。  
とはいえ、モンゴル人は伝統的に移  
動民族で、一年に何度も移動します。  
気に入らなければゲルをたたんで移  
動。一方、日本人は定住した土地で  
仲良く暮らすことが身につけていま  
す。ここにも大きな違いを感じます。

日本にはたくさんさんの命があるが、  
モンゴルには少ない命しかないし水  
もない、そんな環境で幸せに生きて  
いる。平均寿命は、日本人よりかな

り短い。短い命の中で今生きてい  
ることが大切。生き延びることが大事。  
モンゴル人は生きるために食べる。  
どれも印象的な言葉です。それに関  
係して、「モンゴル人は目が1つな  
のに対して、日本人には目が3つあ  
る」といいます。1つの目とは「現  
在」を見る目、3つの目とは「過去・  
現在・未来」を見る目のこと。な  
るほど我々日本人の多くは過去を引  
きずっていたり、未来のことを心配  
しすぎたりしていますね。

最後に「日本とモンゴル、日本人  
とモンゴル人、環境や生活や考え方  
が大きく異なりますが、両方を知っ  
てハイブリッドな日本人・モンゴル  
人になったらどうでしょう。選ばな  
い暮らし、選べる暮らし、どちらも  
面白いですね。」と鈴木さんは話を  
結びました。

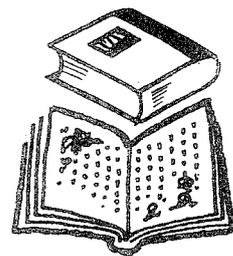
「食」が切り口の講座でしたが、  
鈴木さんのお話は私の人生観にも影  
響を与えてくれました。そして、今  
回体験談を伺ったことでモンゴルへ  
の理解が深まり、これからのモンゴ  
ル人留学生との交流にも役立つと感  
じました。大変貴重なお話をありが  
とうございました。

(産業編集センター)

ブッククラブから

## 中島京子 著 『夢見る帝国図書館』 を読んで

北原 るり子



美術館やホール、大学でお馴染みの上野が舞台の小説である。偶然出会った喜和子さんが、作家の「わたし」に図書館が主人公の小説を書いてほしいと頼む。タイトルは『夢見る帝国図書館』。小説では、喜和子さんを巡る人間模様から彼女の歴史が徐々に紐解かれていくのと並行して、帝国図書館の歴史が時系列で描かれる。

喜和子さんの歴史は、経済的困窮のため幼少期親戚を転々とし、成人後は結婚という名の隷属生活を強いられ、娘が18歳になるのを待ってのち婚家を出るといったものだった。実は幼いときにも親戚の家から逃げ出したことがある、そのとき行き着いたのが上野の図書館で、復員兵で物書きのお兄さんとしばらくブラックで暮らしていたことが明らかになる。お兄さんは『たけくらべ』の話を聞かせてくれたり、図書館の物語を書いていた。自分のルーツが不明の喜和子さんにとって、取り戻したい懐かしい場所がお兄さんと過ごした上野の図書館であり、様変わりしていくその場所を、自分の拠り所となる物語として残したい、という願いがあったであろうことは想像に難くない。喜和子さんの人生は、敗戦という時代が

大きく影響していたとは言え、決して過去のものではない。今の時代、経済的に苦しむ母子家庭、母国を追われる難民、また国外退去を強いられる移民といった問題は枚挙にいとまがないが、そういう人たち一人ひとりに、喜和子さんのような物語があるだろう。

喜和子さんの物語の合間を縫うように、『夢見る帝国図書館』というもうひとつの物語が挿入される。それによると、帝国図書館は明治初期に生まれ、度重なる戦争のため常に資金繰りに困っていたそうだが、別の見方をすれば、その歴史は、戦争に抗って立つ孤高の人というイメージである。高い理想を掲げ万人の教育に尽くそうとする帝国図書館に、どのような人が関わっていたのか、が25のエピソードで語られる。そこで働く人や著名な作家だけではなく、一般庶民が引き寄せられる場所としても描かれる。帝国図書館は、人々に夢を見させてくれる場所なのだ。幼い喜和子さんや復員兵のお兄さんも夢を見るひとりだ。敗戦後GHQ職員として来日するベアテ・シロタもそのひとり。彼女は女性の権利を憲法草案に盛り込もうという想いを胸に帝国図書館を訪れる。

講師の方が、『夢見る帝国図書館』は記録をもとにした創作であるが、創作からでしか語れないものがある、とおっしゃっていた。歴史を知ることにも同じことが言えると感じた。単に記録をなぞるのではなく、その時その場に生きていた人たちの思いを想像することだ。この小説を読んで、そんな経験をする事ができた。

小説の終わりに、お兄さんが書いた本の後書きの一部として、また図書館の正面に刻まれた文言として、「真理がわれらを自由にする」という言葉が紹介される。調べると、ギリシア語の新約聖書からきているようだ。人は、真理と向き合うとき、偏見や誤解、憎しみから解放され、心の自由を回復するということだろう。図書館を愛する喜和子さんも心の傷が癒やされ、喜和子さんの娘も自分を残して家を出た母に対するわだかまりが解けて心に平安が訪れているに違いない。そんなことを想像し、清々しい気持ちで本を閉じた。

(文春文庫)

新着図書から

〈歴史〉

「キノコ雲」の上と下の物語 原田小鈴 (朝日新聞出版) 210  
 人びとの社会戦争 益田肇 (岩波書店) 210  
 気象学者増田善信 小山美砂 (本の泉社) 289  
 旅の記憶 有元葉子 (講談社) 290

〈社会科学〉

「言った者勝ち」社会 朝日新聞取材班 (朝日新聞出版) 312  
 関係の世界へ ケネス・J・ガーゲン (ナカニシヤ出版) 361  
 介護保険は崖っぷち 上野千鶴子 (岩波書店) 364  
 会社は社員を二度殺す 今野晴貴 (文藝春秋) 366  
 ラディカル・マスキュリズム 周司あきら (大月書店) 367  
 ユニヴァースのこども 中井敦子 (創元社) 367

バカなフリして生きるのやめた 仁藤夢乃 (新日本出版社) 367  
 クイアのカナダ旅行記 水上文 (柏書房) 367  
 夫が痴漢で逮捕されました 斉藤章佳 (朝日新聞出版) 368  
 学校の「男性性」を問う 大江未知 (旬報社) 370  
 「ちがいが」がある子とその親の物語 アンドリユー・ソロモン (福村出版) 378  
 戦争を展示する 佐々木真 (大月書店) 391

〈自然科学〉

生命と時間のあいだ 福岡伸一 (新潮社) 460  
 タイガとココア 釧路市動物園 (朝日新聞出版) 489

〈文学〉

をとめよ素晴らしき人生を得よ 瀬戸夏子 (柏書房) 911  
 チョコレート・ピース 青山美智子 (マガジンハウス) 91あ  
 サイレントシンガー 小川洋子 (文藝春秋) 91お  
 逃亡者は北へ向かう 袖月裕子 (新潮社) 91ゆ  
 あずかりっ子 クレア・キーガン (早川書房) 93キ  
 もっと知りたいムーミンとトーヴェ・ヤンソン 橋本優子 (東京美術) 94は  
 コンパートメントNo.6 ロサ・リクソム (みすず書房) 99リ

図書室のしるし

つつみやすじろう 堤康次郎のくにたち大学町開発

お話 老川慶喜 (立教大学名誉教授)



2026(令和8)年4月1日、国立駅は開業100周年を迎えます。国立駅と駅前広場を起点に延びる大学通りと放射状道路(旭通りと富士見通り)、そして碁盤目状の道路により整然と区画された街並みは、整備から100年たつてなお、多くの市民に愛されています。

この街並みは大正末期、西武グループ創業の祖・堤康次郎が経営する箱根土地株式会社(現・株式会社西武・プリンスホテルズワールドワイド)によって開発されました。堤は、1923(大正12)年の関東大震災によって壊滅的な打撃を受けた東京商科大学(現・一橋大学)と共に、谷保村北部に広がる当時「ヤマ」と呼ばれていた雑木林の開発に着手、「国立大学町」が誕生しました。

なかでも、国立駅は国立大学町開発にあたって最初に構想され、町の構造や計画の中心に位置づけられました。今回の図書室のつどいでは、国立駅開業100年の節目に、国立大学町の生みの親「堤康次郎」について近著のある老川慶喜さんか

らお話を伺います。老川さんは長年鉄道史研究を重ね、多くの著作がありますが、その研究の中で、別荘地や学園都市の開発を手掛け、併せて鉄道会社を創業するなど、新中間層(サラリーマン)を対象に「土地」開発を進めた堤に注目されています。

堤が何を思い、「国立大学町」を造ったのか。丁寧な研究を積み上げ、堤康次郎という人物の核心に迫る老川さんの考察を伺います。

〈老川さんの本〉『堤康次郎 西武グループと20世紀日本の開発事業』(中公新書)、『近代日本の鉄道構想』(日本経済評論社) 他多数

とき 2月22日(日) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 2月6日(金)朝9時〜

電話または申込フォームより

公民館 ☎042(572)5141



図書室のこころ

言葉に分け入ったとき

—日本語という外国語を操る9人のエピソード—

お話 北村 浩子(日本語教師、ライター)

外国語を学んだことのある方なら、言語を獲得するということの困難さを一度は感じたことがあるかと思います。今回ご紹介するのは、そんな困難さを乗り越えて、日本語という外国語を巧みに操る9人の方のエピソード。

「山々」という表現はあるけれど「川々」は無い、ひらがなの「い」や「こ」が難しい……などなど、日本語を母語としない方にとって日本語は不思議でいっぱい。9人それぞれのユニークな学習方法や苦い経験などお話しいただきながら、広く「新しい言語を獲得すること」について考える講座とします。また、北村さんの日本語教師という立場から、日本語を教えるときに大切にしていることについても伺います。

日本語を教える立場にある方はもちろん、外国語ができるようになりたいと一度でも考えたことがある方、「言葉」に少しでも興味を持ったことがある方はぜひご参加ください。

〈北村さんの本〉『日本語教師、外国人に日本語を学ぶ』(小学館)、『ヒロ☆コラム 素顔のようなもの』(日本文化出版)

とき 3月7日(土) 昼2時〜4時

ところ 公民館 地下ホール

定員 70名(申込先着順)

申込先 2月12日(木) 朝9時〜

電話または申込フォームより

公民館 ☎042(572)5141



〈私の本棚から 第4回〉

中山七里 著

『有罪、とA-Iは告げた』

川越 彩心 あやみ



この本、新書本かと思いきや、れっきとした物語(フィクション)である。そして私は、この物語を読んで、大きな衝撃を受けた。これは、A-Iと人間の関係性を通して、「人間にしかできないことは何か」、「そもそも『人間』とは何なのか」という、A-Iと人間の永遠のテーマについて、非常に深く考えさせられる名作である。

この物語の主人公は、高円寺<sup>こうえんじまが</sup>という裁判官だ。彼女は上司から、中国より提供されたA-I裁判官、

《法神2》の検証を命じられる。このA-I裁判官は、普通のA-Iとは一線を画す性能を有していた。それは、裁判記録を入力すると、その裁判を担当した裁判官の思考を「再現」し、その裁判官が書くであろう判決文と、下すであろう判決を自動的に出力する、というもの。つまり、この《法神2》は、裁判官のコピー人格を作り上げることが出来るA-Iなのだ。裁判官が徹夜で、頭を悩ませながら書いた判決文を、それと変わらないクオリティーで一瞬にして作り上げるA-Iの登場。それは、日々業務に忙殺される、円をはじめとした裁判官たちにとっての福音だった。何せ自分のコピーなのだ。相棒、と言っても過言ではない。円は、そう頭では分かっているが、それでも、どうしてもA-Iに対する疑念がぬぐえないでいた。そんなある日、18歳の少年による父親刺殺事件が発生。裁判長を務める男は、裁判が開かれる

前に《法神2》を使って事前に判決を出力した。その判決は「死刑」。そして、裁判が開かれる——これが、この物語の粗筋だ。

「A-I生成イラスト」等をはじめとした、A-Iによって作られた動画、曲、文章などを。A-Iは、画像・動画生成A-Iに対話型A-Iと、あらゆる形をもって私たちの生活へ入り込み、日々進化し続けている。人を楽しませることも、人を傷つけることも、人の人生を変えることも出来る、人間と変わらぬ「自我」をもったもの——そういう捉え方だ。出来る程に。それほどに、A-Iは人間に近づいてきているのだ。

そうしてA-Iが台頭してくる世の中で、私たちは、「A-Iとどう関わるのか」を常に問われ続けている。「依存」か、「共生」か、「敵対」か——それを決めるのは、常に人間でなければならないのだ。立ち止まり、悩み、考え、決断し、責任を取ることが出来る人間でなければ。それすらもA-Iが決めるようになった時、世の中はどう変化していくのか?

この物語は、A-Iに全てを委ね、自分で考えることを放棄する人間たちへ向けた警鐘だ。だが同時に、一つの大きな可能性も秘めている。それは、人間が人間であることを放棄しない限り、常に「共生」という選択肢は存在する——ということだ。

伏線回収に衝撃的な裁判の結末と、文学的な面白さも溢れているこの物語を、是非手に取ってほしい。そして、考えてみてほしいのだ。人間とA-Iの未来を。  
(小学館)